



郷土史

ていね

第 211 号

令和 7 年 11 月 12 日発行

手稲郷土史研究会創会 20 周年記念講演会

手稲郷土史研究会創会 20 周年記念講演会が下記の様に開催いたしました。

日 時：令和 7 年 10 月 11 日（土）13：00～15：30

場 所：手稲区民センター 2F 大ホール

内 容：挨拶講演 「手稲の恩人 蓑輪早三郎」 にふれて

手稲郷土史研究会会長 沖田 紘昭

講 演 「新駅誕生による移住と札幌の移り変わり」

北海道開拓の村 館長 中島 宏一氏

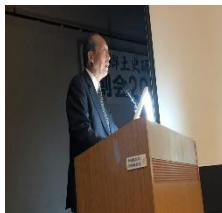
当日は、手稲区の方を中心に 160 名超のご来場を頂き、

皆様の関心の深さを感じました。

以下に講演の要旨を掲載いたします。



挨拶講演 「手稲の恩人 蓑輪早三郎」 にふれて



手稲郷土史研究会会長 沖田 紘昭

手稲の近代化は上水道の整備からはじまる

昭和 42 年 3 月、手稲町は札幌市と合併いたしました。その時の町長が今日の主人公蓑輪早三郎氏です。今日のお題が「手稲の恩人」となっていますが、現在この街に暮らす我々の生活基盤の多くが、彼の町長時代に作られたか、計画された事だからです。蓑輪町長が最も苦労したのが上水道の整備でした。町長選挙で水道を引く事を公約に掲げ戦ったこともあります。その時は時期尚早として議会から拒否されました。金山、軽川、西町上水場の整備までは任期中に出来ましたが、昭和 41 年、人口が 3 万人に迫り、その先の計画は未知数でした。

その頃、道央地域は新産都市の認可を受け、

それぞれの町が工業団地の整備を掲げていました。その工業用水問題でも、定山渓ダムの取水権をめぐり、札幌市と小樽市、手稲町連合が戦いました。100 万都市を目指す札幌市にとっても、銭函に大きな工業団地を抱える小樽市にとっても、また手稲工業団地にとっても水が大問題だったわけです。大都市の間に入って、蓑輪町長の堂々たる奮闘ぶりは当時世間を騒がせました。永く続いたこの問題も札幌市の原田市長の英断により解決し、その後、札幌冬季オリンピックの決定に



より、一挙に合併に至るのです。

手稲にとって南北をつなぐ道路は死活問題

宅地造成上、上水道、下水道の整備は当然の事、また同時に車社会の到来により道路の整備も必須の課題になってきました。国道、道道、町道とそれぞれに計画を作つては陳情を繰り返してきた問題も、札幌市との合併で一気にチャンスが訪れたのです。合併の条件に計画の全てを加え実現を約束しました。その結果、現在の手稲区では南北を繋ぐ橋が7本も架かっていますが、他の区を見てもそのような区はありません。

中学校へ行けなかつたことが彼の人生を造り変えた

復三郎の誕生は明治37年、軽川に生まれました。幼年期はやんちゃで言うことを聞かず、地域では「隊長」と呼ばれていたと回顧しています。やがて中学校受験となるのですが、親が頑として許してくれない。長男が札幌一中にはいり、19歳で結核で死んでいたからです。父に言わせれば「中学なんかに行くからだ」ということです。それでも内証で受験し合格するのですが、泣く泣く諦めて店の仕事を手伝うことになりました。しかしその後が違いました。彼は徐々に地域で頭角を現し、さまざまな要職が与えられるようになります。そこで知らないことに取り組み、勉強し、提案し、実現できる事を学んだのです。その後段々に増えていき、最盛期には30を超える肩書を持っていたと書かれています。その全てを、町民の為、自分の為と思い、進んで引き受けたと言っています。その姿勢は、道町村会会長になってからも続き、「町村会長、只今勉強中」と随筆にも書いております。正に中学校に行けなかつたことが、その後の彼の人生を大きく変えたのです。

書にしたしむ

開発広報の人物紹介によれば、囲碁将棋、麻雀、俳句、短歌、野球、相撲なんでもござれだったようです。その中でも“書”をよくしたようです。手稲町誌の巻頭に「温故知新」と載っています。町村知事、原田市長にならんでの健筆で全く引けを取りません。また手稲記念館の手稲開基百年記念碑誌、近くの時習館跡の碑誌に彼の筆跡を見ることが出来ます。

福翁自伝より「獸身を成して、後に人心を養う」

蓑輪早三郎は、軽川生まれの、軽川育ち。小さい時にはやんちゃなガキ大将で、みながら「隊長」とよばれ、思いっきり遊び、体を鍛え、その後に人としての心を養う、これを地で行った人でした。こんなに正直で、一生懸命な人はめったにいない。これが、彼が中学校へ行けなかつたために、その後の人生を勉強と決め捧げた人のいさぎよい生きざまでした。

平成2年2月19日に葬儀が行われています。享年86歳。

講演 「新駅誕生による移住と札幌の移り変わり」

北海道開拓の村 館長 中島 宏一様



1. 手稲駅と町の形成

幌内鉄道が開業した翌年の1881年(明治14年、軽川駅(現手稲駅)が開設された。

駅の設置は、当地域が鉄道開業以前から交通の要衝であったからである。現在の手稲駅界隈(手稲本町)は明治期以来「軽川」と呼ばれ、開拓使が本庁を札幌(現在の北海道庁)に設置する際、小樽から札幌までの幹線道路であるとともに石狩方面への結節点として重視された

1934年(昭和9)駅舎が改築された。この駅舎は奥手稲に開設された山小屋にちなんで、山小屋造りとした珍しい建物であった。外部はすべてトドマツの丸太を組み合わせ、上屋の梁はハシの木、柱はオシコ、その他エゾマツなど北海道産の木材を皮付きのまま使ったという。また、改札口の木柵は白樺の皮付きであった。長い間、「軽川」といえば、丸太造りの駅として有名であった。(右写真)



手稲村は、1951年(昭和26)に町制移行し、軽川の駅名が「手稲」に改称されたのは翌年の1952年(同27)である。

2. 札幌市の成長と手稲区の人口急増

(1)郊外で発展する住宅地

1972年(昭和47)に開催された札幌冬季オリンピックと前後して札幌市の人囗は急増し、町は再開発され、街並みは広がっていった。人口の増加は住宅供給不足をもたらし、郊外に住宅地が拡大していく。このため、札幌市や北海道などの行政や公団、民間事業者の手によって、市営住宅、道営住宅、公団住宅などを札幌市近郊に設置された。現手稲区内での住宅団地は、前田地区37ヶ所(昭和45~48)、手稲駅前19ヶ所(昭和42~50)、手稲本町15ヶ所(昭和45~50)、ていね稲積106ヶ所(昭和49~57)、手稲あけぼの24ヶ所(昭和49~52)などである。このほか、手稲区には手稲工業団地、発寒工業団地など、この時期に工業団地が造成されたことも大きい。

(2)手稲の発展

昭和30年頃までの手稲地区は、野菜や果樹、米、牧草、牛乳や酪農製品を供給する近郊農村地帯であった。その後、札幌市の人囗増加に伴い、手稲地区でも宅地、工場が誘致され、手稲は近郊農村から住宅工業団地として大きく変貌する。1967年(昭和42)札幌市と合併した頃からは人口が急増し、急激な都市化が進んだ。

大阪万国博覧会が開催された1970年(昭和45)、札幌市の人囗は100万人を超え、その後年に10~20万人規模で市内の人囗が増加していく。特に人口の増加傾向が顕著だったのは、1965年(昭和40)から1995年(平成7年)にかけての30年間で、同市の人囗は821万人から1,757万人と倍増している。

ここで注視したいのは、1989年(平成元)に分区した厚別区と手稲区の人囗の伸びである。分区前の1965年(昭和40)時と現在とを比較すると9~10倍の伸びを示している。さらに、手稲区は厚別区と比較して町内会数が多いのが特筆される。

札幌市の人囗増加は、鉄道の駅の開設をもたらす。特に、国鉄函館本線沿線の人囗増加は顕著で、長距離輸送に特化していて国鉄も人囗増加地域に駅を設置するようになる。

3. 駅の新設と運行本数の増加

(1)国鉄末期に設置された手稲区内の駅

札幌市の人囗は増加を続け、1980年(昭和55)には1,401,757人で1985年(同60)には1,542,979人と10%、1995年(平成7)には1,757,025人と25%も増加している。人口が急増していく手稲区内では住宅等は鉄道(国鉄)沿線沿いに整備されていくが、当時、国鉄沿線である函館本線の琴似~手稲間は7km、札沼線(学園都市線)の桑園~新琴似間は5.6kmもあり、市内にありながら駅間の住民が国鉄で通勤通学するには不便を強いられたことは否めない。

そこで、分割・民営化を見据えた国鉄再末期の1986年(昭和61)11月のダイヤ改正で、国鉄は函館本線の星置~手稲間に稲穂、手稲~琴似間に稲積公園、発寒、発寒中央の3駅を一気に設置した。

新駅設置の効果はすぐに表れ、1980年(昭和55)の国鉄利用者(乗車人員)は一日あたり85,000人であったのが、新駅設置後の1990年(平成2)には132,000人と急増している。その後も運行本数の増加や観光客輸

送も合わせり、2010年(平成22)には197,000人まで増加している。

(2)列車本数の増加

新駅の設置とともに列車の運行本数も首都圏並みに増加していく。

札幌・手稲間の運行本数は、新駅が設置された1986年(同61)の改正時には1980年(同55)当時より倍近く増便した。データイムの運転間隔も札幌-手稲間10分、手稲-小樽間と札幌-江別間各20分に改善された。その後も運行本数は増加し、2020年(令和2)には123本(下り)と1980年当時の52本の2.4倍増を示している。朝夕のラッシュ時間帯も大幅に増便され、1982年(昭和57)と比較して、2025年(令和7)では、同区間の朝方ラッシュ時(7~8時台の2時間)の運転本数は20本(内、手稲始発7本(うち3本は「ホームライナー」、ほしみ始発2本、小樽及び小樽以遠発11本(内1本は快速ニセコライナー(蘭越6:17発-札幌8:50着)。同、札幌~手稲間の夕方ラッシュ時(17~19時台の3時間)の運転本数は28本(内、手稲止まり5本、ほしみ行き6本、小樽又は小樽以遠行き17本(このうち快速列車7本)で、いずれも倍増している。

なお、1995年(平成7)3月の改正時には、銭函と星置間に「ほしみ」駅を開設している。同駅は星置地域の宅地拡大に伴う請願駅で札幌市の最西端に位置し、小樽市の銭函工業団地にも近い。また、同駅止まり始発の列車も設定され、列車の折り返しは隣駅の銭函駅を使用している。

4. 懸念される町の将来

函館線の新駅6駅の乗車人員は、沿線人口の増加により駅開設時より増加しているが、2018年(平成30)と比較すると2023年(令和5)時点でいずれも減少しており、手稲区内では稲穂駅を除き最大20%減少している駅もある。下表は駅職員配置駅3駅の一日あたりの乗車人数を示す。手稲駅は最多乗車人員を記録した2017年から13.5%減、星置駅は26%減、稲積公園駅は26.7%減少している。しかも、通勤・通学の定期券利用者も減少しており、手稲駅はしばらく道内2位または3位の利用者数であったが、2023年(令和5)に新札幌駅に抜かれ、現在、札幌駅、新千歳空港駅、新札幌駅に次ぐ第4位である。

一方、苗穂駅は30%増、桑園駅と新札幌駅は5%ほど減少しているが、定期券利用者の減少は少ない。再開発が進む苗穂、桑園駅周辺は流入人口が多いことが利用客数に反映されていると思われる。一方、新札幌駅がある厚別区は手稲区より人口増加率が鈍化し、かつ高齢化率も高いが、隣接する清田区と江別市方面からの利用客が下支えしていると考えられる。

駅／年	1989 年	最大乗車人数年	2024 年
手稲	11,730 人	2016(平成 28): 15,589 人 2017(平成 29): 15,660 人	13,549 人
星置	2,820 人	2010(平成 22): 6,550 人 2011(平成 23): 6,560 人	4,860 人
稲積公園	3,430 人	1995(平成 7): 5,350 人 1996(平成 8): 5,470 人	4,010 人

※北海道旅客鉄道調べ。稲穂駅とほしみ駅は無人駅のためデータなし。

現在から25年後の2050年、手稲区の人口は減少し高齢化率は44%を超えることが予想されている。札幌方面との鉄道連絡、近郊移動のバス路線維持等交通インフラの今後も懸念される。官民が協働して将来の手稲区を創っていくことを考へるのはけっして遅くはないと考える。

当日、北海道新聞の記者さんが取材に来場し、
10月16日の朝刊に講演会の記事が掲載されました。



手稲郷土史研究会創会20周年記念出版祝賀会



令和7年10月24日午後6時より「手稲郷土史研究会創会20周年記念出版祝賀会」を区民センターにて行いました。 当日は、手稲区 里区長様をはじめ「たゆまざる歩み 第2巻」の出版にご協力、ご協賛いただきました方々をお招きしました。出席者はご来賓8名、会員19名でした。

初めに、沖田会長よりこの本の出版に至る経緯、また表紙に使用させていただきました富樫正雄画伯のお話を含む挨拶がありました。

ご来賓の方々のご紹介に続いて、ご来賓を代表して里手稲区長様より、区長室より表紙に描かれた増毛連山が望まれるとのお話を含むご祝辞を頂きました。

そして、今回本の販売に大変ご協力いただきました手稲区連合町内会連絡橋議会の平川会長より乾杯のご発声を頂き、ご歓談がスタートし、各テーブル時間を忘れお話が大変盛り上がっていました。



最後に、立花副会長による閉会の辞によって終了いたしました。

—研修視察—

令和7年10月21日北海道新幹線 札樽トンネル星置工区の視察を行いました。



当時は、参加者17名（イオン社員2名含む）で、午後1時半に手稲区役所を出発し現場事務所（鹿島・岩田地崎・荒井・森川特定建設工事共同企業体）に到着後、現場で用意していただいた車に分乗し、斜坑を通り掘削現場（切刃）より20m手前まで案内していただき説明を頂きました。

星置工区は全長3300mで、先ず札幌方面に100m掘削し、現在は小樽方面に掘削中であり2191m（10月21日8時）終了し、ほぼ天狗山の真下辺りに当たるとのことでした。

工法は、岩盤が強いため発破（ダイナマイト）とロックボルトを使用したNATM（ナトム）工法を用いており、1日約4回の発破で、約4mの進捗状況との説明でした。

参加者皆さん「なかなか経験できないことを経験させていただき、大変有意義だった」との感想でした。（文責 伊藤）

—研 究 部 報告—

「ふるさと手稲の歴史」の案内板（13基）の清掃を研究部員立花邦雄、梶本孝、濱埜静子の3名で平成7年10月28日、29日に行いました。

ほとんどの案内板に破損個所があり、傷みが酷く、中には読み取りができない案内板がありました。結果を写真と一緒に手稲区地域振興課に報告しました。

この「ふるさと手稲の歴史」の案内板は、手稲区に私たち手稲郷土史研究会が協力して設置しました。平成27年8月27日に第1回史跡案内板巡りを行いその後区の要請により史跡の点検作業を行い、その時は移動していたり、消失した史跡もありました。

久しぶりの案内板で、案内板をまたみんなと一緒に訪ねて「手稲の歴史」を振り返ってみたいと思いました。（文責 濱埜）



訂 正

210号の次回定例会の発表者のお名前に誤りがありました。梅澤卓司様に訂正してください。大変失礼いたしました、お詫び申し上げます。

次回定例会 令和7年12月10日(水) 18時15分～ 区民センター3階視聴覚室

発表内容 「わが家の歴史」 手稲郷土史研究会 会員 一ノ宮 護

手稲郷土史研究会 会報「郷土史ていね」第211号 令和7年11月12日発行

発行責任者：沖田紘昭（手稲郷土史研究会 会長） 編集：菊池博行・伊藤政克

◆006-0818 札幌市手稲区前田8条11丁目4-5 林俊一 方 手稲郷土史研究会

*TEL 090-3381-4994 *FAX 011-682-9874

◆メールアドレス teinenorekishi@gmail.com 担当 菊池 博行